

牧師室から (2021.12.12)

先日教会員からオルガンのCDを貸していただき聴いたところ、先ず教会の一つの大きな鐘が鳴り、それに続いていくつかの鐘がポリフォニックに鳴り響いた。それから軽快であり且つ重厚な音でブクステフーデのトッカータが奏でられ、天気の良い朝に気持ちよくマッチして爽快であった。

ブクステフーデは、トーマス・マンの生地であるハンザ都市リューベックの聖母マリア教会で首席オルガニストを勤めていた。小生もその地には2度ほど行ったが、一度は仕事であり、そのもう一つの有名な聖ヤコブ教会のオルガンのためであった。そのオルガンのフロントパイプには人の顔が描かれていて、そのパイプの歌口が開いた人の口になっていた。そこで少し奇妙に思い、その牧師に訊いたところ、それはプネウマ(霊、息)の発出を表しているということであった。また別の機会に訪ねた時、帰りは丁度日曜日だったので、車は市内通行禁止だったのにもかかわらず、突っ切って行ったらある婦人から怒鳴られ、窓を叩かれ怖い思いをしたことがあったのをふと思い出した。

話しをブクステフーデで戻すが、彼は当時の音楽界における大家であっただけでなく、皆が憧れるその教会で首席オルガニストだけでなく、執務もしていた重鎮であった。そのブクステフーデの後任として多くのオルガニストがその地位を虎視眈々と狙っていたようである。事実何人かのオルガニストや、ヘンデルや、バッハもリューベックに来訪して彼に会っている。ところが彼らはその地位を得ることなく帰ってしまった。実は当時後任を与えられることと、その娘を娶ることが内々抱き合わせであったらしい。というのはブクステフーデ自身も前任のオルガニストの娘を娶っていたのだ。

最終的には程々のオルガニストが、彼の娘と結婚して継ぐことになるのでよいのだが、偉い父親を持った娘の悲哀というか苦勞が伝わってくる話しである。もしあのバッハが、ブクステフーデの娘と結婚してリューベックのオルガニストになっていたら、音楽史は大きく変わっていたのではないかと妄想してみた。

(鈴木淳一牧師)